



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

祖母の教え

金沢大学附属病院 血液内科 岩城 憲子

私のスマートフォンには決して消せない、けれど心穏やかに直視できないファイルがあります。「ばあちゃんの一代記」と名前を付けた30分にわたる音声ファイルです。大正6年生まれの祖母が96歳の時に、孫娘の私と、私の姉に向かって話した事を、祖母には内緒でこっそり録音したものです。

祖母は90歳を超えても、自分のことは自分でする、をモットーに自宅で生活していました。でも、だんだん体の自由が利かなくなり、話すだけでも息切れがするようになっていました。もともとあまり自分のことについて話さない人でした。その祖母が、自分の人生について、こんなに話をしてくれるのは今回が最後かもしれないという思いが、ふと頭をよぎり、録音ボタンを押した事を覚えています。

祖母は、能登の海岸沿いの小さな村の比較的裕福な家に生まれたそうです。「お嬢さん」と呼ばれ「ばあや」がいた幼少期を経て、岩城家に嫁ぎ、戦争を経験し、さらに若くして夫を急病で亡くしました。その後は、夫の跡を継ぎ、郵便局長になり、私の父を含む4人の子供を育て上げました。私は一番下の内孫だったこともあり、ばあちゃんにはとてもかわいがってもらいました。私は、ばあちゃんが大好きでした。

突然、だんなさんが亡くなって、大変やった?と聞くと、若いころの苦労は買ってでもするもんや。と返されました。その頃は、女の局長さん少なかったやろ?大変やったんじゃない?と聞くと、みんなが助けてくれたからね。と。

今、孫娘の私は、病院で働きつつ、残念ながら、決して毎日心穏やかに前向きなわけではありません。心が折れてもう無理だと思ふ時や、自分に自信がなくなって、もうできないと思う時も多々あります。そして、ばあちゃんのことを思い出します。私も踏ん張らねばと。

祖母は97歳で他界しました。脳出血でした。前日まで、自分で夕食を摂り、娘に電話し、おやすみと言ってベッドに入り、起きてこなかった祖母は、本当に見事なほどに大往生でした。

祖母は、ばあちゃんっ子だった私に色々なことを教えてくれました。そして最後に、家族が亡くなることの悲しみや、寂しさ、もう会えないことの意味を、身をもって教えてくれました。火葬場で扉が閉まり、ゴーっという炎の音がした時の、感謝と哀しみと、あの圧倒的な寂しさは、これまで感じたことのないものでした。

病院ではたくさんの方を診療し、時にお見送りします。その一人一人の患者さんの人生に、喜びと哀しみがあること。大往生の祖母の死でさえ、音声ファイルを聞くことをちゅうちょしてしまうほど、心にぽっかりと穴が開いたこと。まして、ご病気や事故でご家族を亡くす喪失感、どれほどかと思いを馳せます。

当たり前で、当然と言われそうな事を改めて書くことは、少し面はゆい気もしますが、祖母がもう一度教えてくれた「初心」を忘れず、また今日も働き、生きていきたいと思っています。